

## 「シリーズ・アーカイブ」 マキキ資料保存室より（#3）

'From the Archives...' by Wayne Tadaki

### 「奥村牧師夫人」

私達の教会の創立者である奥村多喜衛牧師は、勇敢で精力的な神の奉仕者でした。奥村牧師は多くの地域組織や教育活動に深く関わると同時に、マキキ教会に集う会衆を導き育てました。彼は神のみ国に真っ直ぐに歩むという決意と不屈の精神で、イエスによる希望や示される道を歩いていきました。ところでこの偉人が、自分より強く活力のあるものから力を得ていたことをご存知ですか？

下記はこのお話の詳細を『恩寵70年』『奥村多喜衛説教集』『博愛新聞—ハワイの素晴らしき女性』から抜粋したものです。

小川勝（カツ）は日本の大阪で米穀商の箱入り娘として育ちました。初等教育と三味線や裁縫を多少身に付けた程度で、1886年に彼女の父が亡くなった時、彼女の将来は約束されたものではありませんでした。翌年1月15日大した家事の経験もないままようやく21才になった彼女は奥村多喜衛と結婚しました。若い多喜衛と妻のカツは、比較的裕福な家庭で育ちましたが、妻とは違い多喜衛は高い教育を受けていました。彼は1870年から80年代、日本の政治的変革の時、政治家や議員になろうと燃えていました。政治家を試みて失敗した後、彼の親戚が貿易商になるよう勧めましたがそれも上手くいきませんでした。それから行政機関の仕事、商品販売業、政府契約の仕事などもしましたが、どれも駄目でした。奥村は後にこの酷い失敗の数々について「私は一文無しになった。私は手も足も出なくなり、動くことも出来なくなった。金銭的な束縛から抜け出そうとすればするほど、さらに深く沈んでしまった。次男春樹が産まれた時は、前日からの残り金が13銭しかなかった。私はついに諦め、日々の生計に関しては全て妻の采配に任せた。」と述べています。



彼の若い妻はこの時、二人の子どもを抱え仕事に出ました。彼らが結婚した時、彼女はたくさんの衣類や化粧道具などを持ってきました。しかし彼女はたった一組の着替えとひとつの帯だけになるまで、それらをひとつひとつ質屋に売り、家計を一日一日支えるだけのお金を手に入れてきました。その時奥村牧師は「この時初めて妻の真価を認め感謝し始めた。」と言い、「私達の結婚から2年後、私の母、妻、私の3人は共に洗礼を受け、大阪教会の会員になった。その頃から、キリストの教えが彼女の人生の全てとなり、生涯信仰のみで通した。彼女はどんな困難なことがあってもつぶやかず、侮辱、無礼や傲慢なことをされても文句を口にすることはなかった。」と続けました。

家族のひどい貧困にもかかわらず、奥村の祈りは4年間同志社大学で学ぶ決断をさせました。奥村牧師は当時を振り返りこう言います。「同志社に在学していた4年間、妻は母と祖母に仕え、洗濯裁縫などの仕事をしながら2人の子どもを養育した（原本から）。大阪教会の宮川牧師はいつも『あなたとあなたの奥さんのように貧乏したものはそれほどいないだろう。しかしよく立派に切り抜けた。それは全く奥さんの献身と自己犠牲のおかげだ。』」

そして本当に驚くことに奥村牧師は大変な決断をし、このように振り返りました。「同志社を卒業後すぐに私はハワイに来た。私の契約はたったの3年だったので、私は妻と母に家庭のことを任せてきた。ちょうどハワイに来てから2年経った時、私はハワイに定住しようと決心し、日本に戻り、妻と3人の子ども達を連れてハワイに帰ってきた。私はホノルルを突然経ったので、あらかじめ家族に知らせていなかった。彼らは私が横浜からそのことを伝えた時、本当に驚いていた。...ホノルルを発って1か月半で、私は妻と3人の子どもを連れてまたハワイに

帰って来た。」

3人の息子と突然戻って来た夫と、当然のカルチャーショックや全くの新しい環境にもかかわらず、カツ夫人は静かによく働きました。奥村多喜衛牧師のハワイでの宣教が徐々に広まり、少年少女の為に奥村ホームを始め、数々の地域の活動や運動が盛んになり、忙しくなり活力が奪われるような時にもです。彼はこれらの大切な働きが上手くいくように当然のように家族を頼り、特にカツ夫人を信頼していました。奥村牧師は奥村ホームの運営に関して彼女の貢献を回顧します。「寄宿生は増え続け、平均70名になり、かつては神学校だったパンチボールにある建物に移った。...ここを運営するのに私達が雇うことが出来たのは料理人だけだった。誰の援助もなく、妻が一人で細部にわたって献立の準備から子ども達の世話や教育まで行った。質素な着物と帯を身にまとい、朝から晩まで女中やウエイトレスか子守のようにせっせと働いた。さらに妻は子どもひとりひとりのお漏らしをした後の片づけから寝小便の着替えまで面倒を見ていた。どこから見ても大変な生活だった。」

奥村牧師は続けます。「私は二ヶ月に一度位は他島訪問し1、2週間は留守をした。時には日本とか米本土へ旅行（長いのは世界旅行）をした。2、3ヶ月から半年ほども留守をした。この留守中の諸事一切が妻の肩にかかった。」

カツ夫人の召天から7年目に立派な彼女の生涯を振り返り、奥村牧師はこう述べています。「50年の結婚生活の中で、最初に日本で過ごした7年間は極貧だった。それからのハワイで過ごした43年はずっと繁忙の生活だった。しかし妻は貧困の時も困窮の時も、また喜びの時も忠実に自分を律して私を助けてくれた。私がかこハワイで成し遂げたことは全て、他の人に見えない妻の働きがあったからである。」そしてカツ夫人は止むことのない信仰とたゆみない働きを続け、大家族の中で母親として慕われ、寄宿していた子ども達にも「カツ母さん」「おくさん」と呼ばれていました。奥村牧師は「私達には13人の子ども達が与えられ、2人は死産、1人の息子は1歳にならないうちに病死、3人の息子は次々に成人になるうという時期に亡くなった。残った7人の子ども達は、4人が息子で3人が娘であり、健在である（1949年）」と語りました。

最後に奥村牧師はこのように言います。「彼女が最後に病に倒れたのは1941年12月だった。戦争が始まって以来、ニューヨークにいる二人の子ども達のことを心配したり、引き受けている子供たちの米や醤油が充分にあるか気にしていた。何やかにやと心配し、最後には彼女の心を弱めた。病気は一進一退であったが、1942年3月5日永眠した。（享年80才）」

彼女は1778年から1978年の200年間に生きた『ハワイの素晴らしき女性』約50名の一人に選ばれ紹介されました。

私達の最も尊敬するマキキ創設者の陰には、目立たず、忍耐力と強さを持った「カツ母さん」の存在がありました。

彼女は素晴らしい信仰を持ち、物静かで、控えめで、謙虚に働きました。

「カツ母さん」ありがとうございました。ご苦労様でした。

**Happy Mother's Day!!**

本文は'From the Archives...' 英語部週報インサート 2017年5月14日号の日本語版です。

本文: ウエイン・タダキ      日本語訳: フロイド由起

